本体（漆工芸）　修理報告書（抜粋）

北村工房

破損状況

・表面の黒漆塗りには汚れや埃が堆積しており、白く艶のない状態である。向かって右側の正面扉は横方向に汚れの流れたような跡が残っている。しかし漆塗膜の表面は比較的状態が安定しており、緊急を要する状態ではない。
・長押や框の角､降棟先付近などの部材接合部付近に構造部から起因する亀裂が生じている。また軸部は柱と背板の接合部に沿って亀裂が生じるなど、同様の損傷が随所に見られる。このような損傷は厨子の上部よりも基壇をはじめとした下部に比較的多くみられる。
・基壇の最下段は漆塗りや構造の違いから、後補部材と考えられる。
・厨子内部は底板が木地の収縮により反っており、前後で框との間に大きく隙間が生じている。
・扉は蝶番金具の釘が緩み、不安定な状態になっている。
・背面の欄間、中央横連子の枠部材が一部材欠失している。
・基壇の框に打たれた金銅八双金具は一部に緑青錆が発生している
・全体に亘って各所に打損や小さな塗膜の欠損がみられる。

修理仕様

修理は国指定文化財に対する修理の原則に則り、現状維持を基本とした修理を行うこととし、必要に応じて所蔵担当者と協議しながら修理方針を決定する。

修理においては厨子本体部分を北村工房、彩色部分を㈱文化財保存、金具を（公財）元興寺文化財研究所がそれぞれ担当する。

修理工程（平成27年度分）

Ⅰ．蝶板金具を取り外して分解した各扉を修理所漆工室に搬入した。
Ⅱ．扉の外面は精製水を含ませた綿棒やケイドライを用いて、可能な範囲でクリーニングを行った。
Ⅲ．扉の蝶番金具取付け部周辺の不安定になった漆塗膜を麦漆で所定の位置に接着した。
Ⅳ．内側の絵画面をレーヨン紙で養生した厨子本体を修理所漆工室に搬入した。
Ⅴ．X線写真撮影により背面と柱、長押の接合部の状況を確認し、背板の解体方法の検討を行なった。また、長押の部材接合部周辺に確認できた付着物を採取して元興寺文化財研究所において分析を行った。
Ⅵ．長押と柱の接合部は付着物の分析から膠であることが判明したので、接合部に筆で湯を注して膠を膨潤させ、隙間にペインティングナイフを挿し込みながら接合部を外した。
Ⅶ．長押の角に打ち込まれていた釘はX線写真画像で位置を確認したうえで、漆塗膜を切開して釘の錆で腐朽した周囲の木地を崩し、釘を抜き取った。
Ⅷ．背板と長押の接合部の外面の漆塗膜を切断するため、予めレーヨン紙を澱粉糊で貼って切断部の漆塗膜を養生した。
Ⅸ．背板と長押の接合部の外面漆塗膜をハンドグラインダーで切断し、隙間からペインティ

ングナイフを挿入してスライドさせながら接合部内部を切り離した。その後、背板と長押の接合部の内側も絵画面に損傷を与えないように細心の注意を払いながらハンドグラインダーで漆塗膜を切断して長押を背板から取り外した。

Ⅹ．背板は既に柱とは分離していたが、基台との接合部が一部で接着材によって接着されていたため、隙間にペインティングナイフを挿し込んでスライドさせながら接合部内部を切り離し、背板を本体から取り外した。

Ⅺ．背板が取り外された軸部は支持がなくなって不安定になるため、残り三方の長押の寸法に合わせて切断して薄葉紙で包んだスタイルフォームを組み込んで支持した。

Ⅻ．絵画面の処置のため、㈱文化財保存に移管した。

以　上

修理工程（平成28年度分）

1．（株）文化財保存にて絵画面を取り外した背板と厨子本体を修理所漆工室に搬入した。

2．精製水を含ませた綿棒やケイドライを用いて､厨子本体の漆塗り面を可能な範囲でクリーニングを行なった。

3．框の角や部材接合部は後世の修理と思われる膠泥下地の上に黒色顔料で色調を整えた仕上げが施されていたため、精製水を用いて下地を溶かしながら竹べら等で除去した（写真13～14除去跡が大きな箇所には日本産ヒノキ材で埋木部材を作り、麦漆で接着した。その後、麦漆に木粉と麻繊維混合した刻苧漆を充填し、錆漆を施して形状を整え、漆固めを行なった（写真15～18）。

4．柱と基壇の接合部分に生じた亀裂や底板角部材の欠失部分には、形状に合わせた埋木を作り、Ⅲと同様の手順で刻苧漆、錆漆を施して仕上げた（写真19～21）。

5．浮き上がりのある漆塗膜や、亀裂して剥落の危険がある箇所に、希釈した麦漆を隙間に含浸し、可能な範囲で上から圧力を加えて固定しながら接着を行なった。接着後、漆塗膜に段差が生じて引っかかる恐れのある部分には錆漆を施した（写真22～25）。

6．連子周辺の構造的な破損の修理は、底板を取り外す必要があるため、美術館側と相談の上、今回は現状のままとし、処置を行わないこととした。また、背面の欄間、中央横連子の枠部材の欠失についても、今回は新調せず、現状のままとした。内部底板についても、木地の反りが強く、反りの修正と接着が困難なため、現状のままとした

7．背板と連子の部材を木粉を混合した麦漆で厨子本体に再接着した。取り外しの際に生じた亀裂には刻苧漆を充填し、錆漆、漆固めを行なった（写真26～29）。

8．底板裏面の擦り傷には、生漆を含浸し、錆漆を施した（写真30～31）。

9．内部底板に打たれた釘を除去した。また、側面扉の蝶番金具４個のうち３個は、釘との固定が不十分であったため、釘を抜いて本体から取り外して別保存し、元興寺文化財研究所に移管した（写真32～33）。

10．釘穴には、元興寺文化財研究所で新調される釘を打ち直す際に、固着が安定するように刻苧漆を充填した（写真34～35）。なお、新調する釘は、厨子内部まで貫通しないため、内部の釘跡に刻苧漆の上に錆漆を施した後、漆固めを行ない、表面を整えた（写真36）。

11．除去した泥下地や本体から取り除いた釘、本体に貼り戻せない細かい漆塗膜等は、分類して別保存した。

12．背面の絵画の貼り戻し、金具取り付けなどのため（株）文化財保存に移管した。

13．修理後の写真撮影、図面記録を行ない、報告書を作成した。

修理写真

（写真１）クリーニング前　左前扉

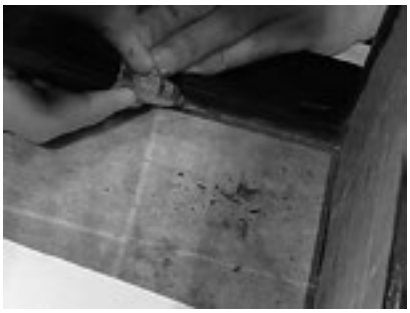
（写真２）クリーニング後　左前扉

（写真３）長押　釘の抜取り作業

（写真４）長押から抜いた釘

（写真５）背板と長押接合部の漆塗膜養生

（写真６）漆塗膜の切断

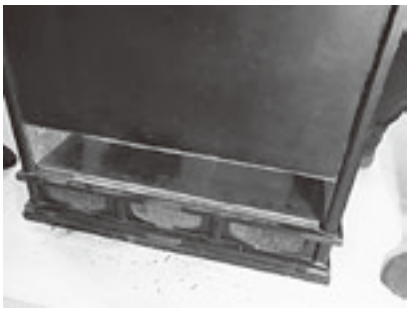


（写真７）長押内側の漆塗膜切断

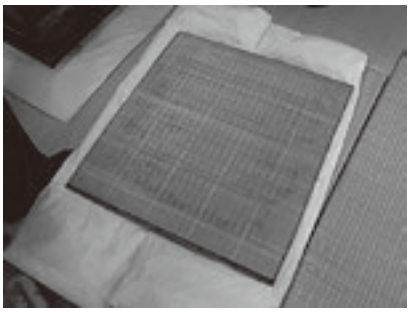
（写真８）長押の取外し

（写真９）取外した長押

（写真10）基台接合部の切断



（写真11）背板の取外し　修理写真



（写真12）取外した背板

（写真13）膠泥下地の除去中

（写真14）除去後

（写真15）膠泥下地除去後

（写真16）修理後

（写真17）底板部材欠失部分　修理前

（写真18）修理後

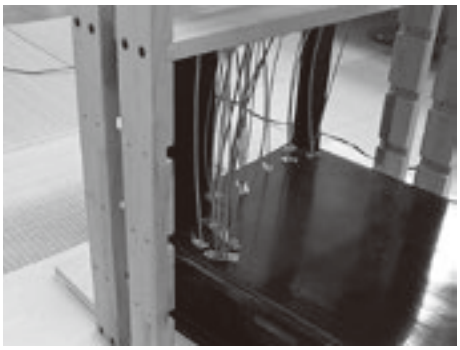
（写真19）埋木による充填修理

（写真20）修理中

（写真21）修理後

（写真22）修理前

（写真23）修理後（金具取り付け前）



（写真24）修理中（芯張りによる加圧接着）

（写真25）修理中（芯張りによる加圧接着）

（写真26）背板の取りつけ

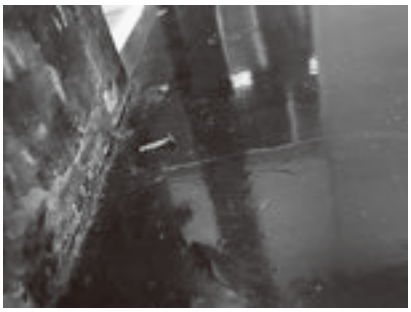
（写真27）背板と本体を木粉を混合した麦漆で接着

（写真28）修理後

（写真29）修理後

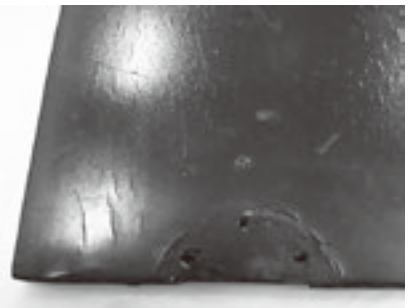
（写真30）底板修理前

（写真31）修理後

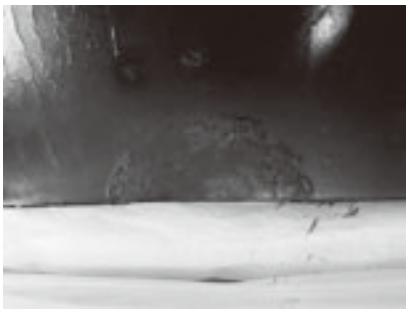


（写真32）釘の取り外し

（写真33）蝶金具を元興寺文化財研究所に
引き渡し



（写真34）釘穴周辺　修理前



（写真35）修理後
（釘を打ち直すため、釘穴に刻苧を充填）

（写真36）修理後　内部の釘穴の様子